

「染まる」と「染める」の間に成り立つ造形 <行為と現象>

大阪芸術大学 工芸学科 特任准教授 舘 正明

染色には、染料による滲み・むら・染み・流れ、蠟や糊の防染剤による半防染などの効果を取り入れた作品がある。これらは作者が染料と防染剤の持つ特性を利用し、防染することの意味を考え、「染まる」という現象を布に表現した行為の結果である。そこには、作者が自己のイメージを布に「染める」だけの一方向の制作ではなく、素材や技法から生まれる「染まる」ことにも注目した双方向の制作が存在する。この「染まる」と「染める」の間にこそ、染色にしかできない表現があるのではないかと考えている。本研究では研究課題を『「染まる」と「染める」の間に成り立つ造形<行為と現象>』とし、自身の制作の中での「染まる」と「染める」の間に成り立つ造形の研究と「行為と現象Ⅱ 本野東一へのまなざし」と題した展覧会の記録冊子の製作を行った。

自身の制作については、今年から新しいシリーズ作品を制作した。人類が布を染めることを始めたきっかけはおそらく、擦れて付いた草の汁や食事の時の食べこぼしなどではないだろうか。偶然についた草や食物の液体が布を染め、その色をもてはやした人々が意図して「染み(しみ)」を染めるようになったと考える。この最初のきっかけは偶然に起こったことであり、人の意思は介在していない。現代の私たちもこのように偶然に布に着いた色を「染み」と呼び、汚れのひとつと考えている。このように意図しないことでネガティブに捉えられがちな「染み」を、制作という行為で意図してポジティブに染めることで、「染み」が勝手に「染まる」と、作品を「染める」の間を作品へ昇華することを試みた。実際の制作は以下の内容である。

蠟には防水性があり、染色において防染剤として用いられる。その蠟を置いたところは染料の浸透を防ぐのであるが、しばしば染料が蠟を透って布を染めることがある。この現象は通常は失敗と見なされるが、本研究では染みが勝手に「染まる」と、作品を「染める」の間を作品へ昇華するという観点から、この現象を意図して起こさせることを考えた。前述したように蠟には防水性があるので、蠟の表面に付着した染料は表面張力によって丸く小さな粒になる。通常制作ではこの段階で不用意な染料の浸透を防ぐため、蠟の上の染料は拭き取るのであるが、そのタイミングや不十分な拭き取り方では、染料が浸透し、布に染みが染まることになる。今回の制作では染料を拭き取らずそのまま放置し、染料が蠟を透って布に浸透する現象を利用し、意図した染みを染め出すこととした。そのためには、はじめは染料の浸透を防ぎ、染料を表面張力によって丸く小さな粒にできる程度の防染力を持つが、次第にその防染力が弱まり、染料の浸透を起こさせるような適度な防染力を持つ蠟が必要である。蠟はその種類によって異なる防染力を持っているので、この条件に適した蠟、またはそれらの配合の割合を探ることからはじめた。結果は「ステアリン酸」のみを使用した場合が最も理想の現象を得ら

れることがわかった。次に染料の色相や濃度の組み合わせである。こちらも色相や濃度の組み合わせによって得られる結果が異なるので、数十種の組み合わせを実験した。結果、2回の工程に分けて2色の色相を重ね染めることが、効果的と考え、その中から8種の組み合わせを使用し、8連作の作品を制作した。以上のような研究結果から、次の内容をコンセプトとし発表した。

「真っ白なシャツを着て、カレーうどんを食べる勇氣は私にはない。しかし黄色の斑点を染めるためならできる。ポジティブな染みを染めたいと考え、溶けた蠟を刷毛につけ、布に塗り、染料で染めた。蠟の撥水性が染料をはじき、染料は表面張力によって丸く小さな粒になる。しばらくすると染料の浸透力が蠟の防染力を上まわり、染料が布に染み込んだ。これが「spots」の制作過程の一部始終である。私はその舞台を整え、この顛末が滞りなく進むことをただただ願っている。そこには染めるという行為と染まるという現象、作為と無作為、意識と無意識、必然と偶然、様々な間が存在する。」

前述の作品を出品したのが「行為と現象Ⅱ 本野東一へのまなざし」である。この展覧会は今回が2回目、これまでの「染める」ことを第一とした作品ではなく、素材や技法の生み出す「染まる」ことに重点をおいた作品を世間に問う展覧会である。この展覧会の企画段階で、私と出品者の加賀城健氏の制作スタイルを考えた時、その源流として本野東一(1916~1996 大阪芸術大学教授)の作品があり、その先に私たちや若い作家がいるという認識になり、その一筋の流れを展覧会で見せたいという考えで、染・清流館所蔵の本野東一氏の作品2点と私(舘 正明)、加賀城健、むらたちひろ、坂野有美の4名の作品を展示した。他の3名も染料や防染剤の持つ特性に注目した制作を行う作家である。感染症拡大防止のため自由な外出が制限される中での開催となったが、本研究の目的である記録冊子を製作することで、作品がより多くの方の目に触れる機会を得ることができたことは大変有意義であると考えている。また、会場にて公開形式のアーティストトークを行い、その内容を記録冊子に掲載する予定だったが、感染症拡大防止の観点からオンラインで開催し、「アーティストトーク『座談会 染めの話をしよう』「行為と現象Ⅱ 本野東一へのまなざし」展をめぐって」と題し、その内容を掲載した。出品者と進行役を含めた5名のみ、非公開のトークのため、参加作家の飾らない言葉で、染めについての本音を語り合う内容となったことも意義あるものだと考えている。染色における表現や技法、素材の「染まる」ことに焦点をおいたこの冊子が、現代の染色の動向をとらえる資料となるとともに、新たな切り口、新しい礎石となることを願っている。